



JCLIFE

2024年
12月号



一般社団法人尾道青年会議所 <http://www.ojc.or.jp/> 〒722-0035 尾道市土堂2-10-3 尾道商工会議所ビル3F
TEL:0848-20-1110 FAX:0848-20-1112 E-mail:ojc@urban.ne.jp Facebook:<http://www.facebook.com/isojcnw>

11月例会 バッジ授与式

11月15日(金) テーマを「結束〜未来へ紡げる組織であるために〜」と題し、通常の形式の例会としては本年度最後となる11月例会を開催しました。

本例会は例会内で執行う新入会メンバーへのバッジ授与式を特別なものにしたという向井委員長の強い思いから、会場をシネマ尾道にて開催しました。

第一章の【激論!真のJCとは】では、青年会議所会員としての基礎知識を、『朝まで生テレビ』さながらの熱量で語り合う拡大研修委員会のVTRが上映されました。

第二章の【ボクらの〇〇時代】では、2024年度の幹事メンバー、委員長メンバー、事務局メンバーの面々が、それぞれの想いや経験を語り合うVTRを上映し、台本のない語らいにメンバーの成長や次年度へ向けての意気込みなどが感じられる時間となりました。



そして、バッジ授与式では、小林理事長から新入会員11名にバッジが授与され、ネームプレートは、新入会員それぞれの主推薦のメンバーによって授与されました。

新入会員代表として、正木孝則君からご挨拶をいただき、これから始まるJC活動への意気込みを感じる事が出来、その熱い言葉から今後の尾道青年会議所の活動がさらに楽しみに、そして頼もしく感じる例会となりました。

(記事:小田康聖)

べつちやう祭

11月1日(金)3日(日)にべつちやう祭が開催され、尾道青年会議所メンバーも神輿や太鼓の担ぎ手として、多くのメンバーが参加しました。

尾道に疫病が蔓延した折の病魔退散の祭事が起源となるべつちやう祭。「ベタ」「シヨーキ」「ソバ」の三鬼神と神輿が尾道市内を練り歩き、神様への感謝と1年の無病息災を祈ります。



1日は、こんな大雨の経験はないと言われるほどの悪天候。暗雲よ晴れろと願いながら、大きな掛け声で祭りを盛り上げようとするメンバーの姿が印象的でした。

その願いが届いたのか、3日はまさに祭日和の快晴。沿道からは大な歓声が上がリ、訪れた多くの観客の皆様と尾道の秋の一大イベントを楽しみました。

尾道の大切な文化に関わる事ができ、尾道を支えてくださる方の愛情や情熱を、一緒に感じる事が出来た素晴らしい機会となりました。

(記事:小迫佳紀)



僕のスポーツアカデミア

マルチスポーツの啓発と子どもたちの運動意識向上をテーマに開催した本事業。
秋晴れの中、100名近くの子どもたちが参加し様々なスポーツに挑戦しました。



2種類以上のスポーツに取り組むことで、子どもの総合的な運動能力を向上させる効果が高いと近年、注目されているマルチスポーツ。その推進活動を積極的にされているウエルネス人財育成研究所の水田氏よりレクチャーをして頂きました。そしてレクチャーの後、いよいよ各グループに分かれて各種スポーツを体験。



体の使い方が上手な子。器用にボールを扱える子。リズム感が良い子。バランス感覚が優れている子。諦めずに食らいつける子。それぞれが持つ素晴らしい個性が見えてくる中、全員に共通していたのは笑顔で果敢にチャレンジしている逞しい姿でした。



体験が終わった後、その場で入部届を書いた子。その場でスポーツ用具を買いに行くという子。クラブからスカウトされる子などなど。この事業の先に続く子どもたちの新しい可能性が開けた場面や話を多く見聞きすることができました。

これも偏にご協力頂いた各スポーツ団体、スクールの皆様のおかげです。本当にありがとうございます。

今回の事業に参加した子どもたちの中から、尾道を代表する未来のスーパーマンが生まれることを楽しみに私たちもより一層、頑張っていこうと思える事業でした。

(記事・福森慈大)



故小林和作画伯を 偲ぶ会

11月4日(月)、西國寺にて故小林和作画伯を偲ぶ会が開催されました。法要及び小林和作画授与式並びに講和会に、本今年度理事メンバーで参加して参りました。墓前では、麻生先輩の読経の中、尾道J



Cメンバーも手を合わせてお焼香をいたしました。その後、西國寺境内にて、尾道市の美術振興に貢献された方に贈られる小林和作画の授与と、手塚弘三先輩による小林画伯にまつわる講話を拝聴しました。尾道の歴史と文化に触れることができ、芸術の秋に新たな学びを得た1日となりました。

(記事・亀田康寿)



秋期

ゴルフ大会



11月23日(土)、尾道うずしおカントリークラブにて、秋期ゴルフ大会(追い出しコンペ)が開催されました。晴天にも恵まれ、多くの先輩方にご参加いただき、現役メンバーともに和気藹々とラウンドさせて頂く事が出来ました。ベスゲロ賞を獲得されたのは2年連続で村上康先輩。今年の接戦を制し、優勝の栄冠に輝いたのは原田秀俊先輩でした。おめでとうございます!

また、今回のゴルフ大会では、追い出しコンペということもあり、卒業予定者の皆様から賞品をご提供いただき、表彰式も明るい雰囲気で行うことができました。

卒業予定者の皆様ありがとうございます。次回は春に開催を予定しております。是非、皆様ご参加下さいますよう、御願い申し上げます。



(記事・加藤雅崇)

卒業生スピーチ



高田 雄太

長年JIC在籍していて、毎年この時期になったら各OBの卒業生スピーチを見てきて、いつか僕もするんだろうなという立場でずっと聴いてきて、気がつくとも本当にあつという間に10年が経って、本日この場に立たせていただいております。

何を話そうかなという考えていたんですけどプロフィールを見ていただいたら分かると思いますが、約10年間、本当に皆様のご支援のおかげで10年間走り続けることができました。

その中でポイントとなる点があつたので、そこをかいつまんで、最後にまとめのお話をさせていたいただけたらなと思っております。

平成28年に幹事として山本慎也先輩が委員長の委員会に入らせていただきました。ここに残っているメンバーだと岡本大輔君や沼田剛志君が同期で入会させていただきました。

その委員会に入らせていただいて、本当に右も左も分からずで、何をやるのかなと。それこそ上程の話であつたり、協議や審議だつたりの話を先輩方が話しますが、全然話についていけなくて、どういった話を自らしていったら良いのかも分からず、時間が過ぎていったのを覚えております。

その当時、人の前に立ってJICエピソードを読むのがものすごく嫌で、合同委員会は必ず7時半に来るようにしていました。それもやっぱり人の前に立って話すところから逃げていたのかなと思えます。ただ委員会メンバーだった川原浩太先輩がそれにすぐ気づいて、「お前はそういうところから逃げるな」と。とにかく「そういう場に出るようにしろ」と言われたのですが、1年間逃げ続けた覚えがあります。

委員会としては、山本慎也委員長、川原浩太副委員長のスパーな委員会でした。太田雄介先輩

もいて、本当に今でいう主だった方々がいる委員会ですごく楽しくもあつたんですけど、厳しさも沢山教わりました。

その当時は、本当に事業二つ例会二つに対する意気込みや熱量がすごいんですよね。これは今でも覚えているんですが、正副がある中で、当時の理事長と専務が抜けてきて、僕たちが委員会をしているところに来られたのを覚えております。裏を返せば、それぐらい委員会が切羽詰まっているという状況でなかなか大変なんだろうなという思いがありながら、僕と山本圭介君は何ができるかなという思いで、2人だけの委員会も何回かしたことがあります。

そういったことも山本慎也委員長が知ってくれて、なかなか動かないところが最終的にケツを叩いて動いてくれたっていうのも聞きましたし、そういったのはものすごく嬉しかったなと思っております。

もう一個印象に残っているのが、家族会があつたんですね。その当時は家族会を百島だつたかどこかでキャンプか何かをするという予定だつたんですが、雨が降つたらどうするかという話もあつたみたいなんですけど、ゴリ押しして理事会に通したんですね。

結局2日前ぐらいに雨予報になつて、どうするか中止にするかという中で、結局中止という判断を取られたんですが、この家族会どうするのかなと思つたら、その時僕と山本慎也委員長と川原浩太先輩と高橋洋樹先輩が集まつて、「車出せ」と言われて、「どこ行くんですか。」と聞くと、「今から福山のドンキホーテにおもちゃを買いに行く」と。それも10万円分。「なんで買いに行くんですか」と聞いたら、「家族会をボーリング会にする」と。そして結局そんなこと上程では通つてないんですよね、何つ。結局、10万円分買つて、帰りの道中で、その当時の副理事長から山本慎也委員長に連絡が掛かつてきて、「どうするんだ？ どうするんだ？」という話

の一方で、川原浩太先輩を筆頭に「ボーリングをするぞ」と。結局、本当にボーリング大会もして無事に終わったんですが、その時僕らはそれがダメっていうのはやっぱり分からないですね。結局、印象に残つていたのが、ボーリングをしているんですけど、その傍らで麻生先輩がずっと山本慎也委員長を捕

まえて、説教じゃないですけど、怒っている姿を覚えていて、今思えばそうなるよなと思つて思つて思つて、その時川原浩太先輩が取つた判断は、確かにJICではダメなのかもしれないんですけど、やはり子どもたちを喜ばすという本質はしっかり捉えていたのかなと思つて、これがJICなのか、というのが1年間でもものすごく印象的でした。今年、幹事の子たちもいると思うんですけど、やはり1年目って何も分からないと思うんですけど、とにかく委員長の姿や副委員長の姿というのを、とにかく見てもえればと思います。自分の進むべき道が段々見えてくるようになったのを覚えております。

そんな中、気がつくとも仕事の関係上でもあつたんですが、太田雄介先輩に呼ばれて、来年セクレタリーをしてくれという流れで、セクレタリーをさせていただきますました。その後も順調にと言いますか、委員長、副委員長をさせていただきますました。

その翌年は岡本大輔君が委員長だつた時に初めてのフロアでした。何の役も無いフロアというのが初めての年で、何をしたらいいのかなという思いで、正直、だいぶ気も抜けていて、2月3月ぐらいからコロナも始まつて、理事長が加度先輩というのもあつて、どうにか盛り上げたいなというのもあつたんですけど、この時のフロアメンバーが僕と平岡君と、川原浩太先輩もいたんですね。岡本大輔君がそのメンバーを聞いたときに、その3人を見て、そんなフラット3の面倒見たくないつて言い出したらくて、それは困つたなと思つて。

確かに岡本大輔君の立場からしたら、その3人がメンバーにいるのが強いようなしんどいような気持ちになる事も分らない事もないなと思ひながら、ただやっぱりコロナ禍でなかなか思うような行動も取れずに四苦八苦して、本当に助けることがなかなかできなくて、この年は本当に申し訳なかつたなという気持ちがいっぱいでした。

その後は副理事長の立場を2年連続させていただきました。そのときに初めて人の面倒を見るというのを覚えていただきました。

特に山本恭平君や加藤雅崇君の面倒を見させていただき、もちろんその他の委員長もいたんですけど、やはり、この2人の面倒を見るっていうのが自分

の中でもものすごく大きな分岐点といえますか、アイブも全然違いますし、考え方も違えば本当に学ぶことが多い年だつたなと思つております。

その結果、令和5年の理事長の年にその2人に支えてもらいながら、あと村上康君と向井豪佑君、岡村虹二君に本当に世話になつたなと思つております。

僕はこの理事長という職に就くことについて、二世だからという思いがかなり今までのJICの中であつたと思うんですが、やはり理事長になる、トップになるっていうのは人気者がなるべきではないかなつて今だからこそ僕は思います。当時の僕にそれがあつたかと言われたら、多分なかつたと思うんですが、この1年間を乗り切れたのは、本当に皆様のおかげで、本当に皆様にご感謝しております。改めてになりますが、本当にありがとうございます。

今年、直前理事長という立場で、本当にゆつくりとさせていただきますが、10年間経つて本当に残り2ヶ月切つてきた中で少し寂しさも出るし、逆にご数年間、下の子たちが多少なり寄つてきてくれて、ゴルフ行つたり飲み行つたりといった場が増えてきているのも、ものすごく嬉しいようで、あともう少しで終わっちゃうんだなというのがある。でも、もつこの10年間で、人と絡むというか、後輩の子たちともうちょよと絡んでおけばよかつたなつていうのは改めて思つております。

この10年間で感じたことが2つありまして、まず1つは、やはり何事も楽しいことはもちろんなんですけど、辛いときにどれだけ周りのメンバーを助けるかというか、そういう姿勢をやるのが大事なんではないかなと思つております。

どうしても辛いことや、嫌なことつて逃げがちなところもあると思うんですけど、そういうところつて結構人が見てるんですね。そういうところで己の姿、己の価値が決まるではないんですけど、結局いつも言つてるようにJICというのは、自分で金払つて、時間割いて来ているので、特にそういったところで見られる部分があると思うので、これから本当に辛いことも沢山あると思うんですけど、逃げるようなことはせずに何事にも向き合う。とにかくそういう姿勢をまず作つて、様々なことに挑んでいただけたらなと思つております。

もう一つが、この間あるメンバーと話してい

て、「JICどうや？」と聞いたら、「楽しいんですけど、最近出てない」と。「なんで出れんのか」と聞いたら、「家庭のこととかいろいろあって。僕はJICに行っただけであらば、帰ったときに奥さんにこういったことがあったとか、こういったことを学んだと。そういうことを言いたくない」と言われました。少し合理的な感じがしたんですね。それもそれで分からないことはないんですけど、全て合理的に進むような人生を送っていくことが、綺麗なようで、ちよと寂しくもあるなと思つています。何が言いたいかというと、とにかくこの40歳までの中で、いかに無駄を打てるか、それが本当に大事なことで、本当にこの10年間で感じさせていたいただきました。

ゴルフであったりとか飲み会であったりとか様々なことあると思つてます。もちろん家庭と仕事の繰り返しで、それも綺麗な人生かなとは思つてんですけど、そんな中でやはりこのJICという組織で、言い方は悪いですが、無駄な会に入つて無駄な金使つて無駄な時間使つて、そんな中で多くの人とも出会いますし、様々なことも学べると思つて、今一度、そういうことも考えながらやっていたきたいなと思つております。

僕も本当にこの10年間で先輩にたくさん怒られてきましたし、急に夜中に電話が鳴つて出ていくこともありましたが、その時その瞬間は、本当に辛かったりとか、面倒だったりとすることもあったんですけど、今思えばそこで多くのことを学びましたし、様々なことも教えていただきました。逆に今、先輩にいろいろなことを伝えることも、そういう経験があったからこそだな、と本場があれば1分でも2分でもいいので顔を出して、様々な方と絡んでいただけたらなと思つて、よろしくお願ひいたします。

す。

以上で僕の卒業生のスピーチとさせていただきます。本当に10年間ありがとうございました。



本年度の卒業生
スピーチのトリを務
めさせていただきました
平岡 良之
務めてまいりたいと思
います。

プロフィールを見ていただければと思いますが、仮入会を含めて15年在籍をさせていただきました。

14年前にこの尾道青年会議所に入会させていただきましたが、その当時に生まれた長男はもうすぐ中学2年生を終えようとしています。そう考えると非常に長い間、この会には在籍させていただきました。

仮入会員の時は25歳くらいで、会社に戻つてきてまだ2、3年くらいで、当然この会のこと何も知らずに入り、わけもわからないまま数年間を過ごしました。

今思うと、本当に大きい規模の事業が多く、改めて卒業を前に先輩方の偉大さを感じております。

5年目くらいから、自分より後に入った先輩が卒業していくんです。あれ？俺より後に入ったのにもしかして俺、このまま卒業せんのかなと思つたことが数年続いています。ここ2、3年になって、あとちよとで卒業だということ意識をするようになりました。今日の日のことを考えると何をしゃべろうかなと思つてはいたんですが、どうしようと思つて今この場に立っています。

入会して数年はろくに出席もせず、本場に御迷惑ばかりを掛けてきましたが、それでも当時の先輩方は私のようなものを遣つていただき、いつもお声掛けをして下

さつていました。そしてご卒業された今でも多くの先輩方にかわいがつていただいており、いつも御馳走になる度に御礼を言うとお返しは自分より若い子にあげてくれと仰つてくださいました。

そうして私はここ数年、先輩方から受けた御恩をお返しすべく、若い会員の皆さんに接しようと思つておりましたが、なかなか先輩方のように格好良くは出来ませんでした。

この15年間、大したことはしなかったんですけど、僕が大事にしてきたのは、青山先輩が卒業年、僕が27、28歳くらいの時の言葉で、「俺はもうあとちよとで卒業する。でもやつぱりもつとお前と早く知り合つておけばよかった。もつと絡んでいけばよかった。」と言つてくれました。

僕はすごい衝撃を受けて、確かに卒業したら一緒に活動もすることもないし、この人とも会うこともなくなるかもしれない。結局、よく飲みに行くし、ゴルフも行くし、いい仲で、よく遊んでいるんですが、その言葉でちよと僕の中でも考え方が変わつて、当時、事業は全部参加させていただきましたが、例えなんて多分出席率30%台ばかり、合同委員会は年に2、3回、そんなレベルの僕が、出るだけ出てみようとか、あの人がするんじゃないかと思つて、あの人が頼まれたらしようがないかと思つて出るようになりました。

青山先輩の言葉で衝撃を受けてから、人を知ろう、人を大事にしよう、人と関わろうと。めちゃくちゃ人見知り、酒を飲まない人と人と喋れないんですけど、でもそう思うようになって、ちよと道が開けたのかなと思つてます。

たくさん先輩と今でもお酒を飲みし遊ぶし、本当に仲がいい先輩ができましたし、先輩はちよとでできなかったんです。これから作りましょう。今日作りま

しよう！

僕別にあんまりいいことも言えないんですけど、まちがどうか、本質とかそういう難しいことはちよとよくわからなくて、でも入ったからにはやつぱり何か得るものを得て卒業すべきだと思つて、それが僕の場合は「人」だったと思つています。

何が成長したのかも分からないですけど、友達がたくさんできました。

よくこの卒業生スピーチで、毎年理事をやりなさい、とかいろいろ話があるんですけど、僕は別に無理なものはないと思つて、ちよと無理してできるならすべきだとは思つてんですけど、でもそんなことよりも、卒業するときにたくさんの友人ができたと思つて卒業する方がよほど豊かなJIC生活じゃないのかなと、今卒業を前にして思うようになりました。

ぜひ、皆さんにもそういうJIC生活を送つていただきたいと思つてます。

卒業を前にまだまだ出来たことはあるなとかまだまだ思ひ残すことが多くあり、非常に寂しい想ひがありますが、それも自分が選択してきた結果で、今ここにおられる皆さんにはそう思つて卒業はしてほしくないなと思つております。

もう僕ら5名の今年の卒業予定者は卒業するとなかなか会うこともないでしょうし、なかなかお手伝いもできなくなるとは思つてんですけど、卒業して皆さんが楽しく活動されてるだとか、ご活躍されてるという話を聞くことが僕の楽しみかなと思つてます。

来年は山本恭平君が理事長をされるといふことで、恭平君を筆頭に皆さんが素晴らしいJIC生活を送れることを祈念申し上げ、私からの卒業生スピーチと代えさせていただきます。

年の瀬迫る今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。私には長女(5歳・いのしし年)と次女(2歳・とら年)がおります。昨年、長女にサンタさんに何を願ひするのか聞くと「私も童年に変更したい。」という、予想を遥かに超える要求が。「流石に…それは…」と諭しても、「彼にできないことはない!」と譲らず。「…大丈夫!長女ちゃんには、【赤ちゃんいのしし年】だから!!」と言う、説得?が功を奏し無事に娘は【赤ちゃんいのしし年】になり、サンタさんからおもちゃも貰つておりました。今年は何を願ひするのやら…。
本年もJICライフをご愛読いただき誠にありがとうございました。皆様、良きクリスマス、年末年始をお迎えください。来年度もどうぞよろしくお願ひします。(記事：加藤 雅崇)

編集
後記

